高崎経済大学論集　第49巻　第３・４合併号　2007　181頁～186頁

〈研究ノート〉

新地場産業への比喩的アプローチ

石　川　弘　道

Metaphorical Approaches to New Traditional Local Industries

Ishikawa Hiromichi

１．はじめに

本学部の「新地場産業の創出と参加型学生教育」プログラムが平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代GP）に採択され、現在３年間の教育プログラムが進行している。本プログラムの１つのキーワードは「新地場産業」である。しかし、武井は「新地場産業の中身については模索中で、現状ではまだこれだというものはありません」[1)]と述べている。そこで、まず地場産業の概念の確認から始め、更に新地場産業創造のヒントを模索するため、地場産業への比喩的アプローチを試み、新しい視点からの議論の展開につなげて行きたい。

一般に地場は地元と解釈され、人（労働力）・物（原材料）・金（資金）・情報（知識・技術）という地元の資源（地域資源）を利・活用した中小・零細企業が地場産業（traditional local industries）・伝統産業（traditional industries）・地域産業（local industries）などを形成する。地域資源が独自の歴史や自然の影響を受け、他の地域との差異が顕著に認識される場合、それらを活かした産業が伝統産業や地場産業となる。しかし、固有の地域資源の活用が十分でない場合や特徴的地域資源に恵まれない場合には、どの地域にも立地可能で、地域的特性を持たない単なる中小企業となり、その地域に存在するという意味での地域産業となる。このうち、地場産業については、地域資源の有効・最適活用だけではなく、地域住民の視点、地域発展への貢献及び高い社会的評価を加えた４項目[2)]が求められる。

IT革命による社会変革と産業の空洞化や価格破壊といった産業構造の変革は、地場産業、地域産業そして伝統産業に大きな影響を与えており、今まさに新たなる地場産業の創出が求められている。地場産業では、これまで地域における生産者を中心とした製造業と流通業に焦点が当てられる

１）岸田孝弥・武井昭編『新地場産業に挑む　大学と企業の新結合』、日本経済評論社、2006年、175～176頁。
２）岸田孝弥・武井昭編『新地場産業に挑む　生活と経済の新結合』、日本経済評論社、2006年、９～11頁。

ことが多かったが、情報化の進展でA.トフラーのいうプロシューマーが出現[3]すれば、消費者が進んで生産に関与することになり、地域の生産者と消費者のかかわりに変化が生じ、市場の役割をも変化させる。

以上のような認識の下、新地場産業の創出に向け、教員・学生と企業との交流による学生への教育プログラムを推進するとき、経験の乏しい学生にとって、地場産業の理解は簡単ではないと想像される。そこで、比喩を用いて地場産業を理解することを考えてみたい。その比喩とは、

① 磁場（magnetic field）

② 時場（occasions agreeable with current trends）

③ 慈場（humanity & charity space）

④ 爺婆＆児場（the elderly & children space）

の4つである。

2．磁場からのアプーチ

磁力の働いている空間を磁場（磁界）といい、「磁力をおよぼしあうものが、磁極に存在するとみて、それを磁気または磁荷という。それに正と負の2種があり、N極の電荷を正、S極の電荷を負とする。つまり、同符号の磁荷はしりぞけあい、異符号の磁荷は引きあう」[4]性質がある。

一般に、磁場は磁力線を描くことによって視覚的に認識できるよう表現される。1つの磁石のN極とS極の磁荷をQmと－Qmとし、その間の距離をRとすると、2つの磁荷におよぼしあう（引き合う）力である磁力（クーロン力）は比例定数をkとすれば、

$$磁力 = -k \cdot Qm \cdot Qm / R^2 \qquad (1)$$

となる。

磁場を地場に重ね合わせると、N極とS極に相当するのはニーズ（needs）とシーズ（seeds）となろう。なぜならば、今日の生活と技術の多様化を背景として、産業社会を考究するとき、消費者のニーズと生産者のシーズが作り出す、求め合う力の存在が前提となるからである。

地場にニーズとシーズが存在すると仮定すれば、地場産業を形成するための地力は、磁力に倣い比例定数をkとし、

$$地力 = -k \cdot Qn \cdot Qs / R^2 \qquad (2)$$

と表せる。

ただし、磁荷に相当する地荷をニーズはQn、シーズは－Qsとし、その間の距離をRとする。ここでは、地荷をニーズやシーズの質と量の総合的な大きさと考える。

1つの磁石による磁場の場合、N極とS極の磁荷の絶対値は常に等しい。しかし、地場における

3）A.トフラー（鈴木・桜井他訳）『第三の波』日本放送協会出版、1980年、381～413頁。
4）熊谷・荒川共著『電磁気学』朝倉書店、1967年、95頁。

ニーズとシーズの地荷は絶対値が等しいとは限らないし、その質的共通部分のみが意味を持ち、共通部分の大きさが地力に関係する。地場における産業の機会を創造するための地力は、QnとQsの積集合をQiとし、

$$Qi = Qn \cap Qs \qquad (3)$$

とすると、

$$地力 = -k\,(Qi)^2 / R^2 \qquad (4)$$

と表すことができる。このことは、QnとQsが存在しても内容に共通性が存在しない、すなわちQi＝０の場合、ニーズとシーズが引き合う地力は発生しないことを示している。

磁場を活用した機械に、電動機（motor）と発電機（dynamo）がある。磁場の中にコイルを巻いた電機子を設置した１つの装置で、２種の機械の働きを実現することができる。つまり、フレミングの左手の法則を応用し、コイルに電流を流せば、回転力が発生し電動機となり、右手の法則を応用し、電機子を回転させればコイルに電流が流れて発電機となる。原理的には１つの装置を２つの機械として利用可能であるが、１時点ではどちらかの機械として使用することになり、市場では専用機として提供されている。

地場における「産業」を磁場における電機子と仮定し、磁場における電流と回転力に対応して、地場資源（人・物・金・情報）の流れである「伝流」と産業・企業が進歩・発展する力である「開展力」を仮定すると「産業機会」が構想され、伝流によって開展力という働きを作る機会である「伝働機」と開展力で伝流を発生させる機会である「発伝機」の２つの機会が形成される。磁場の機械と異なり、地場の機会は２つの機会を同時に実現することができる。いや、むしろ同時に実現させ、相互作用させることに意義がある。

表　磁場と地場

磁　　場		場	地　　場	
Ｎ極とＳ極の存在		前　　提	Ｎ(ニーズ)とＳ(シーズ)の存在	
Ｎ極＝Qm　Ｓ極＝－Qm		磁荷／地荷	ニーズ＝Qn　シーズ＝－Qs	
磁力＝－k・Qm・Qm/R^2		磁力／地力	地力＝－k (Qi) ^{2}/R^2	
電　動　機	発　電　機	機械／機会	伝　働　機	発　伝　機
電　　流	回　転　力	入　　力	伝　　流	開　展　力
回　転　力	電　　流	出　　力	開　展　力	伝　　流
１時点では片方のみ活用可		活用の相違点	１時点で両方同時活用可	
注１　Ｎ極とＳ極の距離＝Ｒ　　ニーズとシーズの距離＝Ｒ				
注２　Ｑｉ＝Ｑｎ ∩ Ｑｓ				
注３　伝流（伝わり流れるもの)＝地場資源（人・物・金・情報）の流れ				
注４　開展力（産業・企業が進歩・発展する力）				
注５　伝働機（伝流で開展力という働きを作る機会）				
注６　発伝機（開展力で伝流を発生させる機会）				

3．その他の比喩的アプローチ

3．1　時場からのアプローチ

時場とは、今の時世にあった場所と定義する。社会の変容が急速・急激である現在、今を正しく捉え、それに相応しい空間を認識・形成することが、地場産業にとって必要不可欠である。今を正しく捉えるためには、過去を正しく認識するための歴史観と将来を正しく見通すための先見性が求められる。なぜならば、現在は過去と未来の連結点だからである。しかし、現状は過去から現在までの単なる積分では得られない。なぜならば、過去と現在を結ぶ関数は必ずしも連続関数では表せないからである。例えば、科学技術を考えてみれば、進化は非連続的である。このことは、現在から未来に向かっても同じである。増田はフーコーの論理から発して、「現在の価値を最大限に尊重するということは現在に固執することではなく、差異を考え、『いかにして現在が現にある現在と違う形で存在しうるか？』と想像することにほかならない」[5]と述べ、「＜エピステーメ＞の概念によって、『連続性』や連続性に連なる『伝統』『発展』『進歩』『精神』といった概念を拒絶しているのです。そうすることによって、たんなる多様性や試行錯誤以上の断絶を知の歩みに刻み込んだわけです」[6]としている。

地場産業を論じる時、過去・現在・未来の連続的流れの中に現在を位置づけ、地域の歴史や伝統を前提条件としたアプローチがとられる。しかし、時にはそれらの連続性を取り払うことも必要ではないか。山下は、「60年前においても、100年前においても、あるいは200年前においても『伝統文化』は『滅びつつあった』にちがいありません。というのも、文化は、つねに創造の過程にあるからです」[7]と指摘している。地域の産業も滅びと創造を繰り返してきたと考えられ、常に創造の過程として捉え続けなければならないであろう。勿論、そこにおいてはニーズもシーズもある時は連続的に、またある時は非連続的に変化をし、その積集合によって地場が形成されると考えたい。

連続・不連続の流れにかかわらず、現在及び将来の方向性は、過去から現在に至る進化の経路に大きく依存する。すなわち、地域は地域における過去の経験と学習によって形成された地域資源に依存して現在があり、未来へと向かう。つまり、地場には「経路依存性（path dependency）」が働いている。そこで、それぞれの地場の産業の生成と発展を捉えるためには、さらには、新地場産業を創造するためには、必然的要素と偶然的要素により決まった地域の歴史の経路を探求する必要がある。

3．2　慈場からのアプローチ

慈場とは、慈しみの空間である。都市化と情報化の進展により、バーチャルな空間での人間関係

5）増田一夫「「現在」のナショナリズムに抗して―フーコーと不連続の歴史―」（小林・船曳編『知の論理』）東京大学出版会、1995年、236頁。さらに、「現に存在する世界や諸制度は、あたかも普遍的、必然的、強制的なものであるかのようにわれわれに呈示されているわけですが、そのなかでなにが特異であり、偶然的であり、恣意的な力によってもたらされたものなのか、という問いを立てることこそ、現在をよりよく生きる流儀なのだ」とも述べている。
6）同上、233頁。
7）山下晋司「神話論理から歴史生成へ―文化人類学と成熟―」（小林・船曳編『知の論理』）東京大学出版会、1995年、143頁。

が華やかに論じられる一方、リアルな空間での人間関係の希薄化が叫ばれている。地場を考える時、人情と思いやりの空間である慈場の視点は、新たなる地場産業創造にヒントを与えるものと考える。

板倉は、「人々が地域に愛着を感ずるのは、そこにある施設とか自然とかいったものではない。そこでの人々との楽しさをともなった交流の存在でありその記憶である」[8]とし、「『生活の質』の実質は、豊かな人間関係にある」[9]と述べている。例えば、プロシューマーを考える時、消費者と生産者の豊かな人間関係が基礎となり、従来型の生産プロセスを変革することにより、生活の質が向上する。また、ものの生産ばかりではなく、人情と思いやりの今という時間を人々が過ごすというコンセプトの地場産業も考えられる。つまり、「慈場という時場」を提供する地場産業である。ただし、それは単なる施設や自然の提供で事足りるものではないし、産業化になじむとも限らない。しかし、産業として豊かな人間関係が構築できる慈場を提供することで、楽しさをともなった交流を誘発することにつなげることもできるであろう。勿論、慈場は産業としてではなく、地域社会に自然に形成されるべきであるとの考えもあり、産業とするには検討課題も多い。

3．3　爺婆＆児場からのアプローチ

爺婆＆児場とは、少子高齢化社会を念頭に高齢者と子供のいる空間に焦点を当てた地場産業へのアプローチである。人口の長期的推移を多段階・修正ロジスティック曲線として捉え、「西欧文明の作り出した人口容量の上限が迫ってきたため、それぞれの文化の中に潜む人口抑制装置が速やかに発動しはじめている」[10]という認識のもと、「いかなる手を打っても、21世紀の日本の人口は減少していく」[11]との見方から、「人口を回復する努力よりも、人口抑制装置の作動を素直に受け入れ、人口減少に見合った社会や経済構造を作り上げる努力を、より優先しなければならない」[12]との意見がある。子供関連産業の需要の総量は、少子化に伴い絶対量の減少は避けられない。しかし、離乳食、ベビー服、玩具等のベビーやローティーン対象の市場は、量的な縮小にもかかわらず、売上高が比例して縮小しているわけではない[13]。そこに製品開発のヒントが隠されている。地場産業は地域の子育ての環境、すなわち児場にフィットした製品・サービスの開発と提供を模索すべきである。

他方、高齢者に対しては「日本の社会において地域生活の豊かさのために、あるいは『生活の質』の内実を具体化し具現化しうるのは、なにほどかの自信と安定感を獲得している、比較的年輩の人々である。こういった人々の精神的社会的『資源』、対話の能力、談話を展開していく能力、楽しさをつくり出す能力、これらを生かすことなくしては、いとも簡単に去っていくには惜しいと感じさせるような地域社会をつくり出すことはできないであろう」[14]との指摘がある。高齢化社会に

8）板倉達文「地域社会の可能性」（林上編『高度情報化の進展と地域社会』）大明堂、1996年、173頁。
9）同上、172頁。
10）古田隆彦『日本はなぜ縮んでゆくのか』情報センター出版局、1999年、134頁。
11）同上、149頁。
12）同上、150頁。
13）同上、214頁。
14）板倉、前掲、173頁。

おける産業の視点を、高齢者のニーズの面に向けるだけではなく、シーズとしての高齢者の議論を深めるべきことを示唆している。しかも、そのシーズは慈場に深くかかわる能力である点に着目すべきであるとともに、少子化に伴う労働力不足への対応策ともなる。

4．おわりに

本稿における地場産業の認識と新地場産業への比喩的アプローチの枠組みは、図のようにまとめることができる。磁場（magnetic field）、時場（occasions agreeable with current trends）、慈場（humanity & charity space）、爺婆&児場（the elderly & children space）を比喩として用いたが、比喩ではなく単なる語呂合わせとの批判も覚悟しなければならない。しかし、情報化、グローバル化の進展により、地場における、地場による、地場のための、地場産業が衰退し、辞場産業（draw back from traditional local industries）となることを回避し、新地場産業を創造することに多少なりともヒントを与えることができればと考えている。

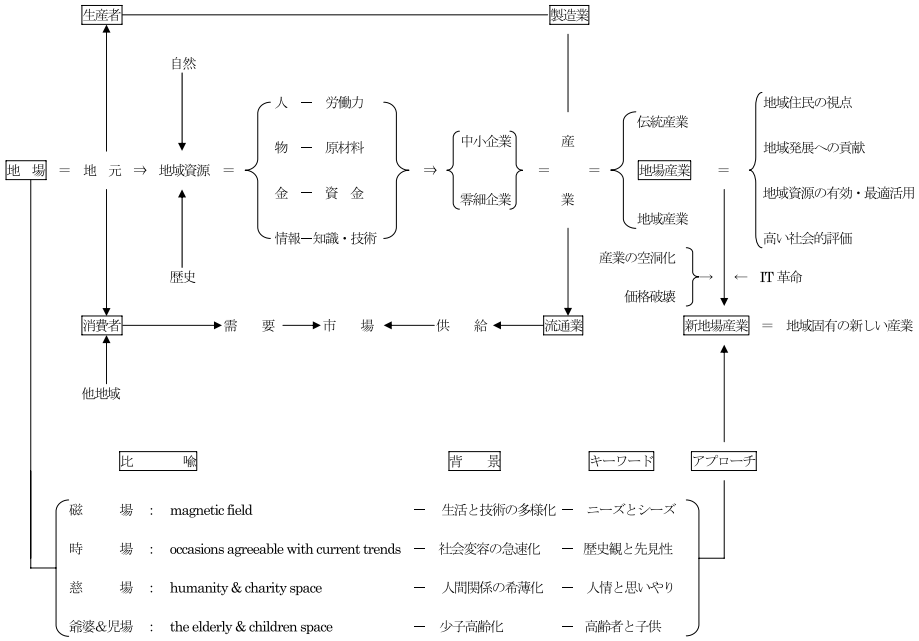

図　新地場産業への比喩的アプローチ

（いしかわ　ひろみち・本学経済学部教授）